

	パターン1	パターン2	パターン3
考えられる 解消金の イメージ	<p>【弁済の充当の特則は置かず、現行の民法の充当の一般則に従う場合】</p> <p>労働契約解消金 + バックペイ + 損害賠償</p> <p>支払により 労働契約終了</p>	<p>【弁済の充当の特則を労働契約法に規定する場合】</p> <p>労働契約解消金 + バックペイ + 損害賠償</p> <p>バックペイ等 を弁済後、 支払により 労働契約終了</p> <p>一部弁済の 場合には バックペイ等 に先に充当</p> <p>※ 先に充当するバックペイの範囲は、判決で支払を命じられた分とする。</p>	<p>労働契約 解消補償金 + バックペイ + 損害賠償</p> <p>労働契約 解消金 支払により 労働契約終了</p> <p>※ 労働契約解消金に含まれるバックペイは、判決で支払を命じられた分とする。</p>
メリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 制度設計がシンプルで分かりやすい。</li> <li>➢ バックペイ等の算定を現行の運用に委ねるため、影響が少ない。</li> </ul>	<p>(パターン1のメリットに加え)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ バックペイの履行確保がより確実となる。</li> <li>➢ 先に充当するバックペイの範囲を判決で支払を命じられた分とすることで、併合提起のインセンティブとなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➢ バックペイの履行確保がより確実となる。</li> <li>➢ 労働契約解消金に含まれるバックペイを判決で支払を命じられた分とすることで、併合提起のインセンティブとなる。</li> </ul>
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 併合提起はあくまで任意であるため、一回的解決にならないおそれ。 ⇒ 制度周知に併せて併合提起を推奨することが考えられる。また、併合提起がされない場合には、使用者が反訴として債務不存在確認の訴えを提起することも考えられる。</li> <li>➢ 解消金、バックペイ及び損害賠償のそれぞれが認められ、一部弁済がされた場合、使用者が弁済を充当すべき債務として解消金を指定してしまい、バックペイ等の支払前に労働契約が終了する場合があります。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 充当の特則については、他に同様の例がなく、法制的な可否の検討が必要</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>論点 労働契約解消金より先に充当する債権は、バックペイのみでよいか。</p> <p>論点 先に充当するバックペイの範囲は、判決で支払を命じられた分でよいか。</p> <p>論点 先に充当するバックペイの範囲について、解雇前に生じていた未払賃金や遅延損害金を含めるか。 (パターン3と同様の論点)</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➢ なぜ労働契約解消補償金を支払ったにもかかわらず、バックペイまでも支払わなければ労働契約が終了しないのか、理論的説明が必要。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>論点 労働契約解消補償金に加え、バックペイを労働契約解消金に含めることについて、どのような理論的説明が考えられるか。</p> <p>論点 労働契約解消金に含まれるバックペイは、判決で支払を命じられた分でよいか。</p> <p>論点 労働契約解消金に含まれるバックペイの範囲に、解雇前に生じていた未払賃金や遅延損害金を含めるか。 (パターン2と同様の論点)</p> </div>